

原田康子
廢園



筑摩書房

魔 園

昭和三十三年二月二十五日初版発行
昭和三十三年四月五日四版発行

定価二二〇円

著 者 原 田 康 子

発行者 古 田 晁

印刷者 根 本 力 三

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京(29)七六五一(代表)
振替東京一六五七六八

廢

園

目

次

五章	四章	三章	二章	一章
.....				
71	51	33	19	7

六章
.....
87

七章
.....
105

八章
.....
123

九章
.....
147

十章
.....
169

撮口 影絵	装 幀
山	堀
田	文
健	子
二	

磨

園

一

章

わたしはなにかに追われていて、それが苦しく、声をあげようとして目が醒めた。掌やみぞおちのあたりが、つめたく汗ばんでいた。

なんの夢をみていたのかしら、いったい。わたしはいつもとおなじように、榎田と隣り合わせた寢床に入っていた。そのことがかえって、現実とは思えず、畳や、枕もとのスタンドや、灰皿や水差しが、ふしぎな青さをおびていた。あるいは、青っぽくみえたのは、夢のつづきがそこにあっただけではなく、未明の仄暗さのせいであっただかも知れない。

障子がもう明るかった。陽がでるのには、まだかなりの時間があるらしかったが、半透明な障子の白さは、たしかに朝のいろであつた。しかし、朝のものはなにもしなかった。わたしの家も、家の周囲もひっそり静まっていた。まだ町は眠っている。みんなは眠っている。わたしの隣りに寝ている人も深く眠っていた。

私は、また眠ろうと思って目をとじた。するとサン・ルームのわきの櫟の葉鳴りが、きこえ

てきた。秋を告げているような、かすかな葉鳴りで、わたしは夢のなかでも、その美しい音をきいたように思った。

はじめの部分が美しかったのに、あとが穢けがれてしまったのは、どういうわけだろう。もっとも夢だから、ちぐはぐに分裂しているのがあたりまえで、ストーリーのあるきちんとまとまった夢をみた記憶はない。今朝の夢ももちろん奇妙で、わたしはすっかり覚えていない。

最初、わたしは白い河原のようなところに寝転んでいた。わたしの頭の上で木の葉が鳴り、葉が落ち、落葉をもてあそんでいる私は一人で、やせた少女であった。わたしは、ごつごつした不格好な黒っぽい服を着ていた。女学生が着る、あのセーラー服であったかもしれない。そのうちに、いつのまにか、わたしはなにかに追われて森の中を走っていた。森が、最初の河原のつづきであったかどうか。森は深く、暗く、わたしは手足から血をながして走った。わたしの追手は、黄色い不気味な声をあげていた。その声がひとつではなく、あちこちで聞え、わたしの目のまえにとつぜん姿をあらわしたとき、わたしは怖ろしさに声をあげようとした。目の大きな、唇の突き出た小人。むかし、おもしろがって読んだ童話のなかに、そんな姿の小人がいたろうか。わたしがこわかったのは、小人たちが女であり、みながみな、妊婦のようにぶく

んとふくれた腹をしていたことである。それらの小人が、黄色い声をあげ、ぞろぞろ、ぞろぞろわたしのまわりを取りまいていた。目を醒ましたのはその辺であらう。

わたしは目をとじたけれど、もう眠れないような気がして、なぜあんな夢をみたのだろう、とぼんやり考えつづけた。

このごろ、わたしはあまり夢をみないし、みても他愛なく忘れてしまう。目がさめてから、はっきariおびえていたとわかる夢は、むろん長いあいだみたことがない。

六年ほどむかし、榎田と結婚するまえ、わたしはよく明方おびえて目をさました。そのころわたしは、十五も年上の、妻子のある男を愛していて、そのことに疲れ、いろんな恐ろしい夢をみた。それにほとんど熟睡もできず、毎夜のように睡眠薬を飲み、あるとき面倒くさくなつて、三十錠入りの一箱をいちどに飲んで、父や兄をあわてさせた。

しかしいまでは、夢でおびえるようななにごとも、現実のなかにはないような気がする。昨日だって、変ったなにごとがあったというのだろう。もしあったとしたらそれは市場に魚を買いに行つて、吐気を感じたことぐらいである。

昨日は、夕暮れになっても涼しくならなかった。わたしは夕食の仕度をするのが、なんと大儀で、だらしなく寝そべって、新聞の漫画をながめていたが、気がつくともう五時にちかく、サンダルをつっかけ、簾編みの籠をもって買物に出た。わたしは、近所の魚屋に行くつもりだったが、家の前からつづくゆるい勾配をゆっくり登りながら、ふと気がかわった。どうして気がかわったのか、はっきりしないけれど、たぶん周囲があまりひっそりしていたので、街の騒音を聞きたくなかったのかもしれない。

わたしの家の近所は、いつもひっそりしている。いくつかなだらかな丘陵の上と丘の中腹、丘の合間に家々が行儀よく並んでいる山の手の住宅街である。

昨日も長い勾配の上には、子供が二、三人石蹴り遊びをしているだけだった。男たちは、まだそとから帰らず、女たちは、帰ってくる男や子供たちのために食事の用意をしている。そんな時刻の静けさがただよっていた。わたしはなんとなく生活の白いむなしさVと、そんなことを気取ってつぶやき、サンダルの音をひたひたたてながら、勾配をのぼりつめ、坂を降りて下町に行った。

わたしはまっすぐ市場に行った。商家の食事はおせいせいか、市場の魚屋や、八百屋のまえ

には、まだ多勢の籠を持った女たちがむらがっていた。市場のなかにはしめっぽい、甘い匂いがする。肉や魚や、野菜がいっしょになった、特有の匂いで、ちいさいころ、母について市場にくると、そのたびにわたしはむせるような気持ちになったものである。わたしはその匂いがいやで、早く買物をすまそうと思い、魚屋のまえに出ようとすると、うしろからきた女が、肩でわたしの肩を押しつけるようにした。相当つよい力だったので、わたしはよろめき、いらいらして女をみると、それはひどくお腹のせりだした妊婦だった。妊娠すると気が立つので、それでこんな乱暴なことをするのかしら、そう思いながら、わたしは彼女の腹部から目をそらすことができなくなった。女は、わたしが見ているのに、気づいた風もなく、

「これを包んでよう、早くさ」

と、店の小僧をせきたて、干したカレイを大量につかんでいた。

わたしは女に憎悪をかんじた。青ぶくれの顔に、目がざらざらひかり、紅のはみでた厚い唇はぬれている。そんな目も唇も、女の異常な大食ぶりを物語っているようだった。わたしはとつぜん吐きたくなった。昼間飲んだグレープ・ジュースの酸が、いっそうつよくなって喉もとに突きあげてくるように思われ、わたしは籠をにぎりしめた。わたしは、ふいに嘔吐感を、わ

たしもじつは妊娠して、あの悪阻つねというもののせいじゃないかしらと疑った。しかし、生理日がすぎたばかりで、そんなはずはなかった。

夢の小人どもは、あの妊婦の化身かもしれない。彼女は、なんの関係もないわたしに憎まれたので、それが癪とぐで、わたしをおびやかしてきたのかもしれない。

あのときもわたしは、この女を憎む理由がどこにあるだろうと、考えていた。彼女は平凡な奥さんで、お腹に子供のいることをたのしみ、胎児の父親を一生けんめい愛しているかもしれないではないかとわたしは思った。

女が魚の包みを抱えて去ったあと、わたしはぼんやりしてしまった。またあとからきた女が、なにか注文を言っていた。わたしは戸惑っていた。

たぶん、わたしは自分の憎悪のはげしきをもてあましたのだろう。このごろのわたしは、はげしい憎しみを感じるなどないから。榎田が、すこしお金を費つかいすぎても、わたしは怒りもしなければ、憎みもしない。『今月はこれで止めとく』などと、彼が口の中でぼそぼそ詫びても、わたしは聞えないふりをして笑っている。そして、へんな自分の薄笑いに気づきはつと
する。

一しょに暮している榎田にたいしてさえそうだから、なんの関係もない他人を憎むことはほとんどない。妊婦は町のあちこちにいて、わたしはよく彼女らを見受け、大きなお腹に目をそそいでしまうけれど、べつにどうということもないのだ。なぜ昨日、あれほどあの女を憎んだのか、わたしにはよくわからない。

変ったことといったら、それだけである。市場の帰りに、従弟と会ったのも、たいしたことではない。

わたしは烏賊と、白菜を一株と卵を買って市場を出た。目抜き通りの人混みの中に入ってすぐ、わたしは弓削京太の姿をみた。この夏わたしは、その従弟を四度ばかりお茶を飲み連れ出したので、当然、ちょっとした挨拶くらいするのが本当だった。わたしが京太をさけたのは、木綿のホームドレスの上に白いエプロンをかけ、烏賊の入った籠をぶらさげていたせいではなく、京太に連れのおったせいでもない。わたしは意識せずに舗道の端を通り、ちょうど前を歩いていた大柄な外人の影にかくれるようにし、そのことに気づいてから、いまさら京太に笑顔をむけることがでなくなつた。

わたしは山の手のほうへ、京太はどこに行くのか、とにかくわたしのほうへむかって歩いて